「震災・学校支援チーム（ＥＡＲＴＨ）員としての活動について」

明石市立錦城中学校
主幹教諭　大谷　誠

１　取組の内容・方法

（１）ＥＡＲＴＨ員としての略歴

２００１年（平成１３年）４月より震災・学校支援チーム（ＥＡＲＴＨ）員となり、以降２０１２年（平成２４年）まで心のケア班に所属し、被災地の児童生徒への心のケア等の活動を行った。

２０１３年（平成２５年）から２０１６年（平成２８年）までは心のケア班班長を務め、２０１７年（平成２９年）からは研究・企画班に所属し活動を継続している。

（２）昨年度までの活動実績

私のＥＡＲＴＨとしての派遣活動は、２００４年（平成１６年）１０月２３日から２６日まで、台風２３号による但馬の水害に係る支援活動が最初である。豊岡市内の避難所となった小学校への支援活動のなかで、現地の教職員への助言・避難所運営の支援・避難してきた児童への心のケアなどを行った。

２０１１年（平成２３年）の東日本大震災においては、３月２２日～２６日に宮城県庁、石巻市などへ派遣され、現地の教職員への助言（心のケアのすすめ方など）、避難所運営の支援などを行ったほか、８月６日～１０日には南三陸町に派遣され、南三陸町の中学生への学習支援を行った。

２０１２年（平成２４年）以降は、２０１５年までの４年間にわたって気仙沼市、南三陸町、石巻市、女川町において中学生への学習支援や教職員を対象とした心のケアの研修会講師、現地の教職員とのグループ協議（心のケアや防災教育のすすめ方など）等を務めた。

２０１６年（平成２８年）発生の熊本地震においては、益城町、御船町、宇土市、菊池市等において、現地の先生方とのグループ協議（心のケアのすすめ方など）や管理職・ＰＴＡ対象の研修会講師、児童のストレス反応への対応の支援等を行った。

写真１　石巻市内の中学校での教職員への助言の様子

他に、２０１６年（平成２８年）に発生した鳥取県中部地震においては、現地の教職員への助言・研修会講師（心のケアや防災教育のすすめ方など）を行った。

（３）熊本県南阿蘇村への長期派遣について

①南阿蘇西小学校での取組

２０１７年（平成２９年）４月１日から２０１８年（平成３０年）３月３１日までの一年間、被災地支援のために熊本県南阿蘇村に派遣された。

防災教育推進の取組として、校内研究推進の主要テーマとして「防災教育と心のケア」を位置づけ、防災教育全体計画・年間指導計画の策定、公開授業の実施、防災教育副読本（地域教材）の開発等を行った。また、心のケア推進の取組として下記の取組を行った。

・校内教職員対象の研修会講師
・ＰＴＡ対象の研修会講師
・定期的な健康観察アンケートの実施
・スクールカウンセラーとの連携
・心のケアを要する児童との面接
・「お話タイム（児童と教師との個別面談）」の実施
・リラクセーション法の実践
・行事の見直し

②校外での取組

熊本県立教育センター等熊本県内各地で心のケア等をテーマとした研修会の講師を務めたほか、南阿蘇村防災教育部会との連携を図り、村内の小中学校で一貫した防災教育にとりくむ足場づくりを行った。

写真２　菊池市内の小学校での研修会の様子

写真３　南阿蘇西小学校での公開授業の様子

（４）今年度（２０１８年・平成３０年）の取組

下記の通り被災地支援や講演会での講師を務めた。

・５月２８日　震災・学校支援チーム（ＥＡＲＴＨ）運営委員会（派遣報告）：兵庫県公館
・６月２５日・６月２７日　高槻市寿永小学校（学校支援）
・６月２６日　阪神地区第１回防災教育研修会講師：川西市みつなかホール
・７月２０日　大阪府高槻市立如是小学校（研修会講師）
・７月２５日　大阪府高槻市立寿永小学校・安岡寺小学校（研修会講師・学校支援）
・８月　１日　播磨東地区第１回防災教育研修会講師：小野市伝統産業会館
・８月　３日　芦屋市立浜風小学校防災教育研修会講師

・８月　９日　兵庫教育研究所・教育課程編成講座講師：ラッセホール
・８月１０日　熊本県学校支援チーム員養成研修会講師：熊本県立教育センター
・８月２１日　震災・学校支援チーム（ＥＡＲＴＨ）訓練・研修会（研修会講師）
・８月２３日　岡山県倉敷市立薗小学校（研修会講師・学校支援）
・８月２７日　県立芦屋国際中等教育学校防災教育研修会講師

写真４　南阿蘇村で開発した防災教育副読本

２　取組の成果

阪神・淡路大震災時の兵庫県がそうであったように、熊本地震などの被災地においては、児童生徒への心のケアのノウハウが確立されておらず、その意味でＥＡＲＴＨがこれまでに蓄積した知識や経験を被災地の方々に伝え、同時に各々の被災地の多様なニーズに応えることができたのは成果のひとつと言える。

また、防災教育についても被災地の先生方と連携して実践の方向性を明確にすることができた。とりわけ、南阿蘇村で被災に負けずに頑張る人々に取材し、その姿をテキストにした「防災教育副読本」を開発できたのは、自分自身にとっても大きな達成感を感じることのできた取組である。

他にも、熊本県における防災教育実践のための教材を共同開発することができた。

３　課題及び今後の取組の方向

阪神・淡路大震災のデータにも示されているように、被災地における児童生徒への心のケアは、長期的展望に立って取り組む必要がある。これまでに行ってきた実践を継続的な活動につなげていくためにも、ＥＡＲＴＨ員としての被災地とのつながりを維持していく必要がある。被災地の復興のためにはインフラの整備ももちろん必要であるが、何よりも求められるのが人と人のつながり・絆である。この事をこれまでの様々な被災地での支援活動を通じて実感してきた。今後もこれまでに関わってきた方々と連携し、活動を続けていきたい。